

生物多様性条約 第10回締約国会議 (COP10)に向けた 動き(その4)

環境省・中部地方環境事務所による 生物多様性・COP10に向けた取り組み

シンポジウム「伊勢湾 森と海の未来」を開催します。

一滴の雨粒が森をとおしぬけ、海に注ぐまでに溢れる生物たちの営み。

私たちの生活や文化はその生物多様性に支えられています。今回のシンポジウムでは、その生活や文化を支えてきた伊勢・三河湾流域(愛知県、三重県と岐阜県及び長野県の一部)で、生物多様性の保全に向けた地域づくりを行っている方々が主役です。プログラムには、「社会的共通資本」としての生物多様性の重要性について宇沢弘文東京大学名誉教授から基調講演があります。

さらに、山と川、そして海をつなげるパネルディスカッションが行われます。意志を同じくする人たちが、次にむけて動き出す一歩となればと思っています。

- 主催：環境省 中部地方環境事務所
- 共催：中日新聞社
- 協賛：カゴメ株式会社、NEXCO中日本、ユニー株式会社
- 日時：平成22年3月6日(土)、13:00～16:15
- 開催場所：ウインクあいち・大ホール(800名、名古屋駅前)
- 対象：中部地方の生物多様性保全に関わる市民、民間団体、企業、自治体など



生物多様性地域対話「生物多様性国家戦略2010」を開催しました

中部地方環境事務所では、平成21年12月22日(火)に『生物多様性地域対話「生物多様性国家戦略2010」』を愛知県名古屋市で開催しました。

環境省では、「生物多様性基本法」に基づく国家戦略の策定作業を進めており、今回の地域対話は、新たな国家戦略の案に対するパブリックコメントが実施(12/10～1/8)されたことから、「生物多様性国家戦略」を知ってもらい、地域で考える場を創ることを目的として開催しました。

前半は環境省担当者より国家戦略(案)についての説明を行い、後半は名古屋市生物多様性企画室の増田室長、タ

レントの原田さとみさん、株式会社博報堂DYメディアソリューションの川廷昌弘さんより話題提供を頂きました。また、意見交換では、会場の参加者とともに地域の生物多様性保全の取組や課題が出され、こうした地域の声を国に届けたいといったことが話されました。

新たな国家戦略は、3月の中央環境審議会にて答申を受けたあと、3月中には閣議決定する予定となっています。



国際生物多様性年キックオフシンポジウム 「つなげる・つながる・つながってゆく! ～命の連鎖～私たちの里海・ 伊勢湾の生物多様性」を開催しました

国際生物多様性年の始まりを記念して、1月23日に三重県鳥羽市で「つなげる・つながる・つながってゆく! ～命の連鎖～私たちの里海・伊勢湾の生物多様性～」を開催しました。

当日は、一般市民と漁業者約150人に参加いただき、熱気あふれるシンポジウムとなりました。

はじめに、田村統括自然保護企画官から生物多様性について説明した後、前川行幸氏(三重大学大学院生物資源学研究科教授)から伊勢湾の生物多様性の現状、課題や対策についてご講演を頂きました。さらに、地域における生物多様性保全の取組事例として、橋本政幸氏(鳥羽磯部漁業協同組合答支所青壮年部部长)からは漁業者によるアラメ再生の取組が、高屋充子氏(きれいな伊勢志摩づくり連絡会会長)からは海岸清掃活動の取組が報告されました。

パネルディスカッションでは、海島遊民くらすの江崎代表、真珠養殖事業者の原条氏もメンバーに加わり、里海とのつながりを再認識することをテーマとして議論が行われました。伊勢湾沿岸に住む市民や漁業者のそれぞれが生物多様性保全のためにできることを考える有意義な機会となりました。



パネルディスカッションの様子

中部発! 全国連携企画 地球のいのち、えがいていこう

平成22年に入り、より多くの国民の皆さんに生物多様性への関心を持っていただくこと、全国の地方環境事務所の連携による「地球のいのち、えがいていこう」(伊勢志摩国立公園 横山ビジターセンター)という企画が始まりました。これは、ビジターセンター等の施設において、皆さんの手で大きな模造紙いっぱいに生きものの絵を描いていこうというものです。

この企画は、伊勢志摩国立公園を担当する環境省職員がビジターセンターで机に落書きする子供たちを見て思い付き、中部地方環境事務所が動き掛けて全国的な取組となったものです。

全国のビジターセンター等(http://chubu.env.go.jp/to_2009/0203b.html)で5月頃まで実施され、中部地方環境事務所が各地の完成作品を集め、「国際生物多様性の日」関連イベント等で展示を行う予定です。



「地球のいのち、えがいていこう」(伊勢志摩国立公園 横山ビジターセンター)の様子



中部地方におけるCOP10に向けた動き

COP10支援実行委員会 国際生物多様性年オープニング記念行事開催

2010年は国連が定める国際生物多様性年です。この幕開けを記念するとともに、本年10月開催のCOP10に向けた開催機運を盛り上げるため、COP10支援実行委員会主催の「国際生物多様性年オープニング記念行事」が1月16日(土)に名鉄ホール(名古屋市中)で、開催されました。

約700名が参加したこの記念行事では、田島環境副大臣の来賓挨拶、「絵画・写真コンテスト」の表彰式の後、「自然との共生」をテーマにC.W.ニコル氏の講演が行われました。

その後のトークセッションではC.W.ニコル氏、谷口義則氏、水野裕子氏が出演し、六郷孝也氏のコーディネートで、名古屋市に絶滅危惧種が生息しているなど、暮らしと生物多様性をテーマに様々な意見交換が行われました。



C.W.ニコル氏

NGOの動き

発足1年を迎えたCBD市民ネットワークは、1月23日(土)、中部大学名古屋キャンパスにおいて第2回総会を開催しました。総会では2009年度の会計、事業、作業部会活動の中間報告がされたほか、COP10に向けた活動計画が発表されました。また、今回は沖縄、福岡、四国、近畿、北海道から参加した会員より、各地域の取組や開催予定のイベントが紹介されました。

1月24日(日)には、中部大学の春日井キャンパスにおいて中部ESD拠点推進会議と中部大学・地域の安全と持続発展領域創生センター主催の「COP10・グローバルESD対話集会」が開催されました。午前は、阿寒アイヌ民族村専務理事の秋辺日出男氏が、アイヌ民族の伝統的な知識・知恵が北海道の生物多様性保全につながってきたことを語られ、引き続き「先住民族の知識、知恵と地域社会の暗黙知—COP10に向けて」と題するパネルディスカッションが行われました。また、午後は、ポスト2010目標に向けて里山、遺伝子組換え、法制度、経済学など、生物多様性に関連したテーマ別に提言が発表され、活発な討論がなされました。

ジュンク堂書店 生物多様性保全の取り組み!



生物多様性コーナー

ジュンク堂書店のロフト名古屋店では、(財)自然公園財団の呼びかけでCOP10開催までの期間、7階西側に永田信行氏の『いきもの宝島の景』をシンボルとした生物多様性コーナーを常設しています。

また、4月までの間、ロフト名古屋店と名古屋店で文庫本を購入すると、動物写真家の大家「田中光常氏」撮影の美しい写真をあしらった『生物多様性ブックカバー』(全6種)のサービスがあります。



生物多様性ブックカバー

COP/MOP5の話題

MOPってなんのこと?

～遺伝子組換え生物による生物多様性の損害に係る責任及び救済について～

生物多様性条約第10回締約国会議(COP10; コップテン)、という言葉は最近耳にする機会が多いと思いますが、COP10と併せて開催されるMOP5(モップファイブ)はご存知でしょうか。

MOP5とはカルタヘナ議定書第5回締約国会議のことです。カルタヘナ議定書は、生物多様性条約を補完し、遺伝子組換え生物(LMO)の使用による生物多様性への悪影響を防止することを目的に平成12年に採択されたものです。

カルタヘナ議定書第27条では、LMOの国境を越える移動から生じる「損害」についての「責任と救済」に関する規則を作成することが求められており、これがMOP5の焦点となります。

MOP5に向け、平成21年2月に開催された作業部会では、この規則を法的拘束力のある補足議定書とすべきという見解のもと交渉が進められるなどMOP5での合意に向けて準備が進められています。

コラム

文化と生物多様性

平成25年に行われる伊勢神宮の第62回式年遷宮は、「環境」の視点から大きな注目を集めています。それは、神宮が再び「自給自足」と「持続可能な社会」を蘇らせたからです。

20年に一度、御正殿、別宮を建て替える式年遷宮は、飛鳥時代に始まり、その御用材は、鎌倉時代中期まで、内宮を取り囲む山々(宮域林)のヒノキでまかなわれてきました。しかし伐採に次ぐ伐採で、資源は枯渇。明治の初めには、禿げ山状態になったといえます。

大正時代に伊勢地方を襲った豪雨を機に、宮域林の「森林計画」が策定され、ヒノキの植樹が行われました。その時植えられたヒノキの間伐材の一部が、80年の時を経て、第62回の式年遷宮で使用されることになりました。宮域林のヒノキが式年遷宮に使われるのは、実に約700年ぶりのこと。人間の反省と英知が、瀕死の山を蘇らせ、再び持続可能な社会を可能にしたのです。いま宮域林の生態系は健全さを取り戻しています。



宮域林で育つ樹齢80年のヒノキ。白い二重線は、200年後の遷宮の御用材とする目印。